



高輪だより

令和6年度7月号

港区立高輪幼稚園

園長 佐藤 幸子

わくわく ぽかぽか
みんなえがおの
たかなわようちえん

自然がいっぱいの園庭で

園長 佐藤幸子

高輪幼稚園の園庭は自然がいっぱいです。朝登園してくると、玄関の前に柿の花が落ちていました。時の経過とともに、それが、小さな柿の実になり、日に日に大きくなっていて、子どもたちはその変化を楽しんでいます。最近、小さなミカンも落ちるようになり、「先生、いい匂いだよ。嗅いでみて」と持ってきて、一緒に嗅いでみると、正にミカンの匂いです。「中は、どうなっているのかな」と言うので、試しに包丁で切ってみました。「わあ！匂いがすごくなった！」と切り口を鼻にくっ付けて嗅いでいました。自然の中には発見や気づきがいっぱいです。

ミカンの木の葉には、アゲハチョウが卵を産みに来ます。うさぎ組では、青虫に「あお君」「きゅうりちゃん」と名前を付けて飼っていました。青虫は『はらぺこあおむし』の絵本で子どもたちには親しみがあり、身近な存在です。名前を付けるとさらに親しみが増します。みんなでよく見たり、声を掛けたりして大切に飼っていました。ある日突然サナギになってしまい「青虫がいなくなった」「どこへ行ったのかな」と言っていたそうです。あお君とサナギが繋がらないところも3歳児らしくて微笑ましいところですね。幼稚園では、ICTの活用を目的として、区からマイクロスコープが配備されました。早速、先生がアゲハチョウの卵を撮影してみました。主に使っているのは子どもですが、先生たちが工夫して使い、楽しむことも大切です。見えない世界がカメラを通して見えてくる面白さは、大人も子どもも共通です。心が躍り、疑問をもち、考えるきっかけになっています。

さて、先日は、小学校からもらったギンヤンマのヤゴがトンボになりました。子どもたちは、「トンボだ！」「お洋服もある」と驚いて見ていました。幼稚園のビオトープにもヤゴがいるのですが、ビオトープで生きられるヤゴの数は広さにより決まっているようで、すみれ組は、うめ組の時からヤゴを飼っています。エサの虫を見つけてはヤゴにあげて育てています。トンボになるのが楽しみです。

今年度は、ビオトープの隣にインセクトホテルを作りました。そだぎを入れていろいろな虫が集まってくるようにしています。時々子どもたちが落ちている夏ミカンを入れたりして様子を見ています。「どんな虫がいるのかな」と興味をもったのぞいてみる子もいます。

すみれ組は、4月より、地域のフルーツ種博士と一緒に果物を食べて、種をまく取り組みをしています。その交流を通して、幼稚園のユスラウメは、種博士が苗を大きくして植えてくださったものだと分かりました。以前は、園庭の桜を見ながら地域の方々がお花見をしたこともあるそうです。自然がいっぱいの園庭は、歴史と思い出もいっぱいです。大切にしていきたいですね。

